

フィッシュウォッチング 発展の功労者 益田一



日本のダイビングの歴史と 益田一の功績

1967年12月6日「日本潜水会」24名のダイバーが伊豆海洋公園に集まり第一回の潜水指導員講習会(合宿)が行われました

はじめに

1950年後半、日本でレジャーでのダイビングが始まりました。当時はアクアラングと呼ばれ、目的はスピアフィッシング(魚をモリで突いて獲る)でした。その頃は海中生物を見て楽しむという発想はありません。もちろんフィッシュウォッチングという言葉もありませんでした。ここ伊豆海洋公園の歴史は日本のレジャーダイビングの歴史と同じ頃から始まります。

同じ頃、ダイビングと出会った当時実業家であった益田一氏(1921～2005)は1964年に現在の伊豆海洋公園ダイビングセンターの前身である東拓アクアスポーツクラブを設立、数年後にダイビングの目的を、さかな突きではなくマリンライフウォッチング(海洋生物観察)であると始めた活動が、現在のダイバー達が楽しんでいるフィッシュウォッチングや自然観察をして海を楽しむレジャーダイビングの出発点となりました。

でも、当時は今のように生きている生物写真が載っている図鑑はありませんでした。水中写真そのものが未熟だったからです。

そんなダイビングの遊び方も無かった時代に、海洋生物研究の手段としてカラーでの水中写真を撮り始め、レジャーダイビングでの自然観察、フィッシュウォッチングの可能性を見だし、海洋生物の生態図鑑の必要性に気付き、制作を日本で最初に手がけてレクリエーションとしてのダイビングの方向性と普及に大きな足跡を残しました。

その後、出版する図鑑類がダイバーに海洋生物観察(フィッシュウォッチング)の楽しさを教え、人口の増加、ダイビング産業の発展にも大きく貢献しました。

伊豆海洋公園をフィッシュウォッチング活動の拠点とした頃には、日本各地で自然観察を楽しむダイビングが始まりましたが、益田一氏は図鑑作成と共にダイビング雑誌やIOPニュース等出版物で海洋生物情報を日本中に発信し、魚を見るだけでなく生態を観察するなど、現在のダイビングの楽しみ方「フィッシュウォッチング」の道筋を作った人物なのです。

ここでは、神奈川県立生命の星地球博物館で開催「益田一展」の関連行事として、主に益田一氏がダイビング産業の発展に貢献した事を中心に、日本のダイビングの歴史と伊豆海洋公園ダイビングセンターの歴史を重ね、紹介していきます。

日本のダイビングの黎明期

1950年代後半 日本でレジャーでのダイビングが始まる



1950年代後半当時のダイバー

日本に駐留していたアメリカ軍より日本にアクアラングが持込まれ、一部の人たちが始めた。当時のダイビングの目的はモリで魚を突く（スピアフィッシング）でした。



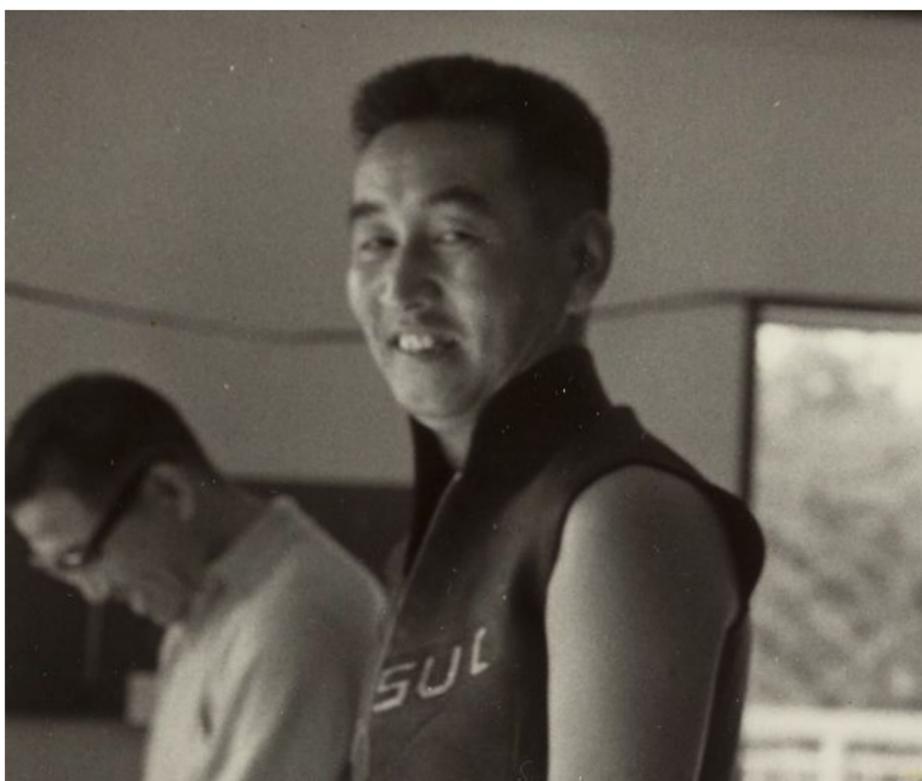
狩猟目的のダイビングでは魚を捕ることは当たり前であった。後に漁業者とのトラブルが多発することとなる



ダイバーの手には魚を突くためのモリがある

1959年 益田一 ダイビング始める

1960年代初め 日本水中科学協会 発足する



実業家であった益田一氏
1959年にダイビングと出会う



フラッシュバルブ付きの
ニコノスを持つ益田一氏

1963年 伊豆海洋公園設立

1964年 東拓アクアスポーツクラブ開設 (現在の伊豆海洋公園ダイビングセンター)

東拓とは伊豆シャボテン公園、伊豆グランパル公園、伊豆海洋公園を開発した東拓興行(株)という会社の名前を略したもので、当時は東拓(トウタク)と呼ばれていました。

祖父に東京海上保険の創立者「益田克徳」、その兄には三井物産会社の創立者「益田孝」という実業家の家系に生まれた益田一氏。

ここをダイビングクラブの拠点とし、この先様々なダイビングを通じた研究活動で、日本の魚類学に大きな功績を残す事となり、始まったばかりのダイビング産業の発展と日本の海洋文化の普及となる活動を行う事となります。



1964年伊豆海洋公園オープン当時の全景
実は伊豆海洋公園前の海岸はオープン前からスピアフィッシングを目的のダイバー達が集まるダイビングポイントであった。そこに東拓が作られた



現在もあるダイビングセンター建物



東拓アクアスポーツクラブハウス
(現在のお弁当置き場/ナイトロックタンク置き場)
当時はここからタンクを背負ってエントリー場所まで歩いていった



クラブハウス内にはモリで突いた魚の魚拓が飾られていた

同時期に伊豆海洋公園内に「ホテルニュー城ヶ崎」と50mプール、潜水用4mプールも作られた



現在の潜水用4mプール(手前)と50mプール(奥)



現在は一階が休憩室、更衣室として使用されている三階建ての建物
当時は「ホテルニュー城ヶ崎」としてレストランもあり、海水浴客に利用されていた



開設当時のダイビングの目的はスピアフィッシング
手にはモリを持つダイバー



日本人だけでなく、米軍基地やアメリカンクラブのダイバーも伊豆海洋公園を訪れていた

種別	入会料	年会費	入会金	年会費
正会員	100,000	300,000	1,000	2,000
準正会員	50,000	150,000	500	1,000
少年会員	10,000	30,000	100	200

開設当初の東拓アクアスポーツクラブパンフレット

潜水教室への誘い
初めてアクアラングをやる方のために「東拓アクアスポーツクラブ」では潜水教室を開催しました。
① 潜水の楽しさ
② 潜水の危険性
③ 潜水の準備
④ 潜水の服装
⑤ 潜水の道具
⑥ 潜水の安全

相模湾に面した伊豆海洋公園、潜水基地としての「東拓アクアスポーツクラブ」が出来た事で、ここを格好の練習場として、のちのダイビング産業を支える多くのダイバー達を輩出する事となった



エントリー場所は現在と同じ
当時のダイバーはWタンク



水中カメラ「ローライマリン」で撮影中のダイバー



海水を汲み上げた50mプール
現在でもスクーバダイビングのトレーニングに適したプールである

1965年 皇太子殿下、美智子妃殿下が伊豆海洋公園へ ご来訪

益田一が海洋公園園内で、ウエットスーツ姿で皇太子殿下(現天皇陛下)にダイビングについての説明を行っている



1966年 東海大学潜水訓練センターを開設

独自のカリキュラムで東海大学海洋学部の生徒を中心に、6日間のコースで多くの研究者としてのダイバーを育成する事となる



この50mプールで安全潜水のための「益田式フリッパー泳法」も生まれ、その後の水中スポーツ大会で多くの勝利をおさめる事となる

伊豆海洋公園を中心に海洋生物の研究を行う事を考えていた益田一氏は、東海大学潜水訓練センターを伊豆海洋公園へ開設。

フインスイミングを中心とした、独自の6日間の講習カリキュラムを作成し、東海大学海洋学部の学生を中心に多くのダイバーの育成に貢献する。

また、このダイビング講習はその内容の充実ぶりから高い評価を得る。その後一般社会人の受講生も多くなり、東海潜水訓練センター、伊豆海洋公園潜水訓練センターと名称を変え、レジャーダイビングとしての講習、ファンダイビングの楽しみ方を教えるスクールとして成長、2001年までに6000名を超えるダイバーを育てる事となる。



東海大学潜水訓練センター当時の受講生
現在のオープンウォーターコースであるが、当初は残圧計もBCDも無いダイビング講習であった。BCDは1980年代から使われ始める

1967年 日本潜水会発足



プールサイドで準備体操をしている



プールでの合宿訓練風景



河野祐一氏



友竹進一氏

1967年12月6日「日本潜水会」24名のダイバーが伊豆海洋公園に集まり第一回の潜水指導員講習会(合宿)が行われる。

この合宿ではダイビングの安全性を高める事を目的に、実力第一主義で泳ぐ事と潜る事にプールと海でのトレーニングプログラムを絞り、徹底的に実施。これらのトレーニングはのちにNHK水中撮影班や海上保安庁のトレーニングに採用される事となる。第一回の合宿参加者には、NHK水中撮影部の「河野祐一氏」や「友竹進一氏」、月刊ダイバーでニッポン潜水グラフィティ連載中の「須賀次郎氏」など、ダイビングの先駆者である蒼々たるメンバーが勢揃いした。益田一氏は特別会員として日本潜水会に参加する。



現在のエントリー場所での集合写真



海洋訓練を終了した姿
右は友竹氏



50mプールサイドにて訓練の説明をしている風景

この頃、益田一氏はスピアフィッシングは漁業関係者とのトラブルも有り、やめようと考えていた。しかし、当時のダイビングの目的はスピアフィッシングであったために、それをやめてしまうと東拓に潜りに来るダイバーがいなくなってしまう心配があった。

だが、益田一氏はここで大きな決断をし、水中銃を水中カメラに持ち替え、魚を捕るから、写真で撮る方向へスイッチ、ダイビングの目的をマリンライフウォッチング「海洋生物観察」へと方向転換をした。同時に日本潜水会第一回合宿でもダイビングの目的を「水中写真」と「競技会」とし、ここでスピアフィッシングと決別する事となったのである。

日本潜水会は競技としての「水中スポーツ大会」を伊豆海洋公園を会場に数多く主催する事となる。

1968年 第一回水中スポーツ大会

東京日本大学プールにて開催

日本潜水会のメンバーが中心となり、東京水産大学、日本大学の学生ダイバーと8月に開催、ダイビングを競技種目とした最初の「水中スポーツ大会」場所は東京の日本大学のプールにて開催された。

1969年 第一回ロレックス杯水中スポーツ大会

伊豆海洋公園にて開催される



第一回ロレックス杯水中スポーツ大会が5月10日～11日の2日間、伊豆海洋公園を会場に開催される。この大会からスイス高級機械式時計メーカーのROLEX社が大会のスポンサーとなり、各種目の優勝者にはROLEX社のサブマリーナが賞品として贈られるようになる。この大会が正確には第二回目の水中スポーツ大会である。

第一回ロレックス杯水中スポーツ大会で総合優勝監督として表彰される益田一氏

その後も、第8回沖縄、第10回静岡三保で開催以外は、伊豆海洋公園を会場に開催された。

第6回(1973年)より全日本潜水連盟が主催となる。

益田一氏も第一回ロレックス杯大会より水中スポーツ大会には精力的に参加。

ダイビングの安全性の向上にはフィンスイム(フリッパー競泳)が不可欠と位置づけ、伊豆海洋公園でのCカードコースカリキュラムやスタッフのトレーニングとしてフィンスイムに取り組み、長期にわたり大会に選手を輩出、多くの種目で優秀な成績を収める。

1993年より開催会場を東京辰巳の国際プールへと移し「全日本スポーツダイビング室内選手権大会」として財団法人社会スポーツセンターが主催、大学サークルやスポーツクラブなど多くのクラブが参加する大会となっている。

現在も益田一氏の教え子達である柳田氏が「伊東フリッパークラブ」を主催し、本大会参加や「海を泳ごう」などを開催、ダイビングの安全性の向上だけでなく、健康、体力づくりとしてのフィンスイムを継承している。昨年2012年12月2日に行われた19回目の大会には87チーム520名もの選手が参加する競技会となっている。

(現在は千葉県国際総合水泳場で開催されている)



スタートの模様を紹介したダイビング雑誌



速く泳ぐだけでなく、水中重量挙げ競技も行われた



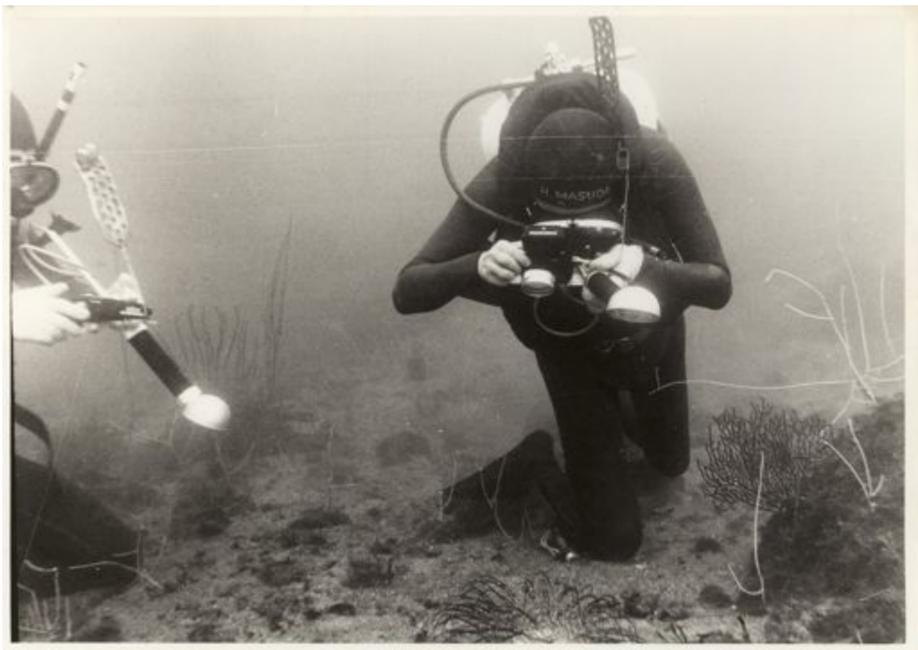
アンダーウォーターナビゲーション(UWN)水中に設置したブイをコンパスを使用して正確に周り早さを競う競技

1967年 益田一 海洋生物研究始める

スピアフィッシングから決別した益田一氏は伊豆海洋公園を中心に海洋生物の研究や水中写真を撮り始める。

当時は海外での海洋生物やサンゴ礁生物の研究は広く行われていたが、それと比べ相模湾周辺の研究は遅れており、伊豆の海で普通に見かける海洋生物に正式な名前が付けられていない状態であった。

そのため研究の中心を相模湾に面した「伊豆海洋公園の海」として本格的に活動を始め、撮影器材もまだ少ない時代にフラッシュバルブと呼ばれる使い捨て写真電球を使用することで、海中世界を鮮やかなカラー写真で紹介する事が可能となった。



水中写真を撮影する益田一氏



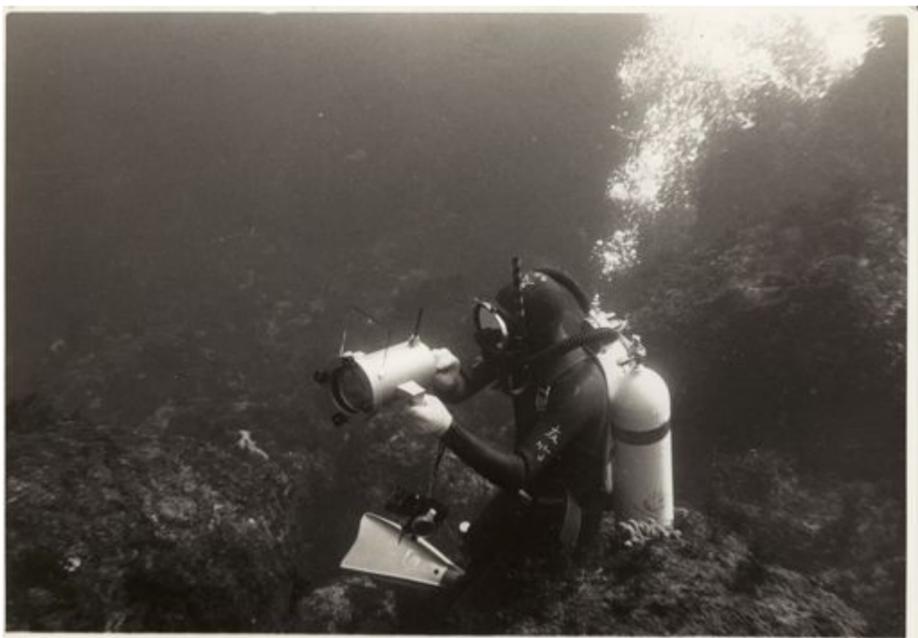
スナイソギンチャクの撮影をしようとしているダイバー



ソフトコーラルを撮影している



シロギスの仲間を撮影している



水中撮影中の友竹進一氏



シビレイを撮影していると思われる

主な研究内容は伊豆海洋公園の海洋生物のカラー水中写真撮影と生物の採集、水槽での観察、撮影。不明な生物を研究者と共に同定、後に数多くの新種の魚を発見する事となる。この研究活動の成果として1969年に「日本の海洋動物 海深90mまで」を出版する。カラーでの水中写真で海の生き物達の生態、そのままの姿が写し出された写真は、それまでの海洋研究に衝撃を与えると共に、海の世界の美しさと魅力を知らせる事となる。同時に自然観察を楽しむダイビングの可能性を見だし、この頃から海中生態図鑑の必要性も感じ始める。この研究活動がベースとなり、その後の図鑑の作製やフィッシュウォッチング普及活動や普及図書の出版へと広がっていく事となる。益田一氏がレジャーダイビングとしてのフィッシュウォッチングを普及させる原点の研究活動がここから始まりました。



採集した魚を減圧するためのバケツを設置している



魚の減圧用バケツの中をチェックしている



Wタンクで潜降中のダイバーの姿



フラッシュバルブを使用してミノカサゴの撮影をする益田一氏



エントリー場所へ向かう益田海洋グループのメンバー 右端が益田一氏



採集した魚をビニール袋に入れているところ

その後のダイビングの歴史

1969年 雑誌「マリンダイビング」創刊
NAUIジャパン設立

1970年 PADIジャパン設立
ジャックマイヨール、海洋公園沖で素潜り76mの世界記録樹立



1991年再来日の際の写真



世界記録樹立した
ジャックマイヨールと益田一氏
富戸港にて撮影

1972年 全日本潜水連盟結成

日本潜水会を中心に中部日本潜水連盟、関西潜水連盟、PADI潜水連盟が母体となり結成される。

1974年 (株)益田海洋プロダクション設立

1975年 沖縄県本土復帰記念事業として、沖縄県国東郡本部町にて海洋博覧会が開催される

1984年 東海大学潜水訓練センターを東海潜水訓練センターと名称変更
テレビ東京「DOスポーツ」で訓練センターのトレーニング風景が紹介される

1987年 NHK趣味講座で「スキューバダイビング」が放映される



東海潜水訓練センターのオープンウォーターコースのカリキュラムを用いてNHK教育放送で初めてのスキューバダイビングコースを放映計9回放映され、番組での講師は西村周氏が務めた。

1989年 ダイビング映画のヒット作「彼女が水着に着替えたなら」上映

この映画の水中撮影シーンでは、スピード感と動きのある映像を水中スクーターを用いて撮影し話題となる。

ちなみにこの映画の水中シーンの撮影者「日本水中映像」中村宏治氏は益田一氏の一番弟子である。配給は東宝



1990年 IOP Diving News発刊

益田一氏 おもな出版物

1969年 最初の出版物「日本の海洋動物」学習研究社

1970年 「続 日本の海洋動物」学習研究社



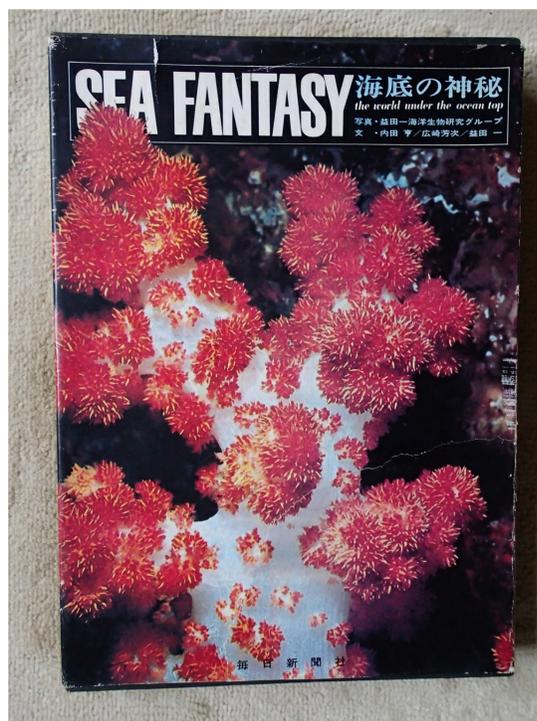
最初の出版物「日本の海洋動物」では伊豆の海を中心とした水中写真で海中生物を色鮮やかなカラー写真で紹介。水深90mまでの世界を記録した出版物は海洋研究の世界に衝撃を与える。また畑正憲氏により伊豆海洋公園での研究活動が紹介される。「続 日本の海洋動物」は北海道から小笠原、沖縄までの海の世界を水中写真で紹介。解説ページに岡田弥一郎先生の研究史も載せられ、海洋生物研究におけるスクーバダイビングと水中写真の有益性を研究者に知らせる事となる。

1971年 「海底の神秘」 毎日新聞社

1972年 「日本列島の魚」 毎日新聞社

「海底の神秘」では相模湾をはじめ、沖縄、北海道で撮影された珍しい海中生物達の生活が水中写真でありのまま鮮明に写し出され、海洋研究の資料として注目される。

「日本列島の魚」では海洋生物の水中写真に解説が付けられ、現在の図鑑に近い形になって来ている。



海底の神秘



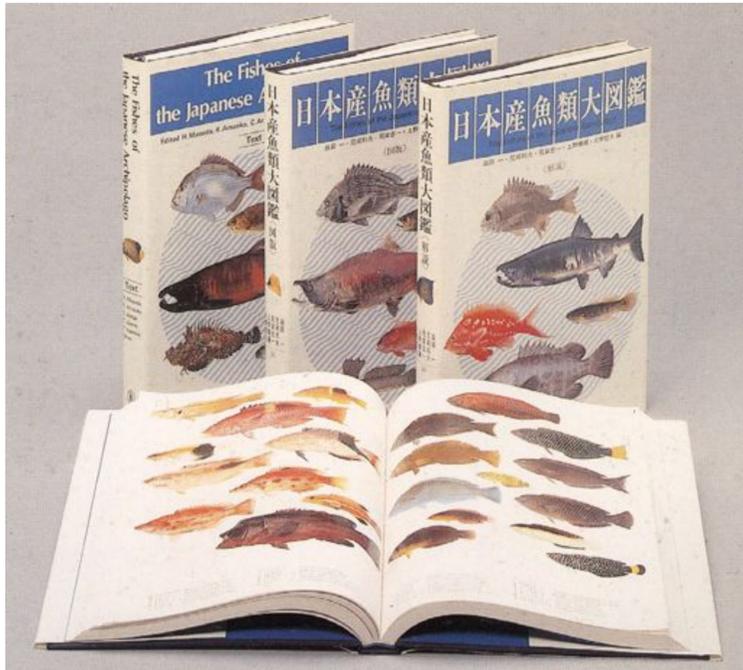
日本列島の魚

1975年 魚類図鑑「南日本の沿岸魚」 東海大学出版会



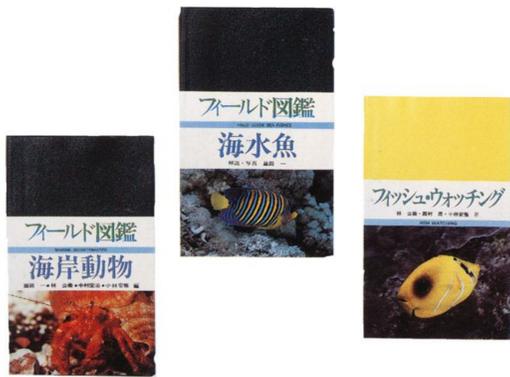
生きた姿を出来るだけ再現出来るよう工夫されたカラーによる標本写真を使用。1252種、1445図版、そのうち日本初記録の魚が151種類掲載、その中には新科新属新種として記載された「ホタテエソ」も含まれている。1967年から始めた海洋生物研究の成果をまとめたものであり、魚類図鑑の中でも画期的、魚類研究者や漁業関係者などへの研究資料としての価値と貢献は大きなものであった。

1984年 日本産魚類大図鑑 東海大学出版会



魚類研究者との交流を通じ多数の図鑑を出版した中でも、当時の皇太子殿下(現在の天皇陛下)を含む日本の研究者が総力を集結、益田一氏が筆頭編者となり纏め上げた本書は、現在でも世界に誇れる業績であると共に、魚類学上重要な書物である。この頃から自然観察を行うダイバー向けの魚類図鑑の制作を手がける。この後に出版される様々な図鑑はフィッシュウォッチングを行うダイバーの手助けとなり、ダイビングの楽しみを得るツールとしての図鑑の存在が、ダイバーを増やす事にも繋がり、ダイビング産業に大きく貢献していく事となる。

1984年 フィールド図鑑 「海水魚」「海岸動物」「フィッシュウォッチング」 東海大学出版会



魚類学だけでなく、ダイバー向けの生態図鑑を出版。84年「海水魚」では生態写真で紹介。86年「海岸動物」では無脊椎動物を生態写真で紹介。同じく86年の「フィッシュウォッチング」では、魚の模様や体色の違いなど、フィッシュウォッチングの具体的な楽しみ方を紹介。これらの本の出現でダイバー達のフィッシュウォッチングの楽しみが大きく広がり、ダイビング人口の増加と普及に貢献する。

1985年 ビデオ フィッシュワールド 日本ビクター 西太平洋篇 / カリブ海・インド洋篇



西太平洋篇では沖縄と伊豆の海、カリブ海・インド洋篇ではモルジブとカリブ海の海中世界を様々な生物を交えてビデオで紹介。海に潜って見られるダイビングの世界の素晴らしさを広く伝える。

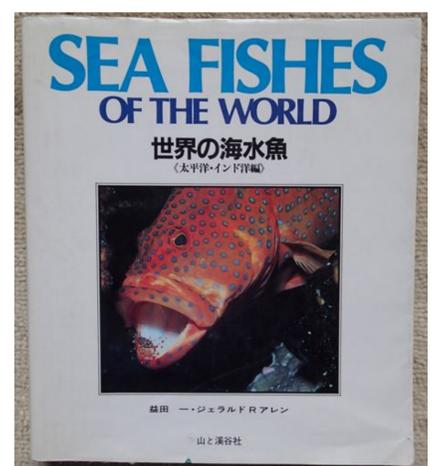
1988年 フィッシュウォッチングシール



今では当たり前の「お魚シール」もこの時代に生態写真で作成。ダイビング終了時のログブックを記入する際に同様の商品が現在でも多数作成販売されている。ダイビングのお楽しみグッズの一つである。

1987年 世界の海水魚 山と溪谷社

オーストラリアパースにある西部オーストラリア博物館で魚類主任を務めていた「ジェラルドアレン」氏と共同で作成。収録魚類数1700種、水中生態写真870枚もの写真が使用され、東太平洋からインド洋の魚類を紹介、同時にビデオも作成された。



1989年 海中図鑑 伊豆の海水魚

東海大学出版会

耐水紙を使用、伊豆で見られる魚の代表種122種を収録。
海の中で使用出来るダイバー向け水中図鑑。



1990年 IOP Diving News 発刊

わずか8ページのこの小冊子であるが海洋生物の情報を魚類生物学に基づきながら、出来る限りダイバーの目線で分かり易く表現した内容で、新しい情報を研究機関だけでなくダイバーへも向けた情報発信誌。2000年2月に上野の国立科学博物館で開催された「天皇陛下御在位10年記念・魚類の多様性に関する国際シンポジウム」の席上、松浦啓一博士の講演の中で「日本の魚類の多様性解明に関する重要な学術雑誌が二つあり、一つは日本魚類学会が発行する学会誌、もうひとつはIOP Diving Newsである」と紹介され、研究者からも高い評価を得た事を証明、海外の研究者からも注目を集めるようになる。



1992年 海水魚 山と溪谷社

生態図鑑の中でも親と子供の色彩や成長過程の色彩や模様の変化なども生態写真で紹介した新たな視点の図鑑を制作。
ダイバー達に新たなフィッシュウォッチングの楽しみ方を示した一冊。



1993年 Fish Watching Guide 伊豆

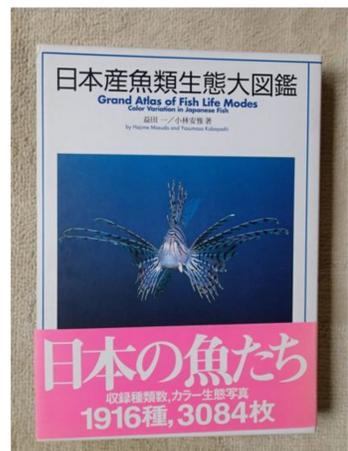


Fish Watching Guide 沖縄 海游舎

魚の見分けワンポイント、生息域や生息状況も解説。187種を収録
スケールも付いたダイバー向け水中図鑑。

1994年 日本産魚類生態大図鑑 東海大学出版会

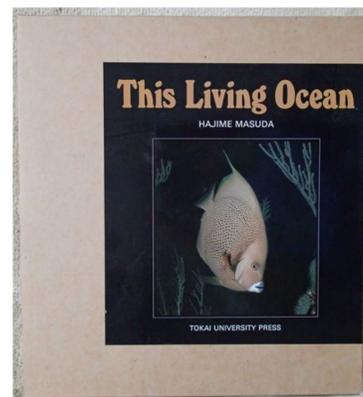
日本産魚類1916種を3084点の生態写真で紹介、収録魚種は成魚と幼魚だけでなく雄雌、色彩変異なども必要に応じて追加、図鑑としてのバリエーションも豊富となり、一般ダイバーだけでなく、現地のガイドダイバー達からもフィッシュウォッチングのアイテムとして高い評価を得る図鑑となる。



1996年 This Living Ocean

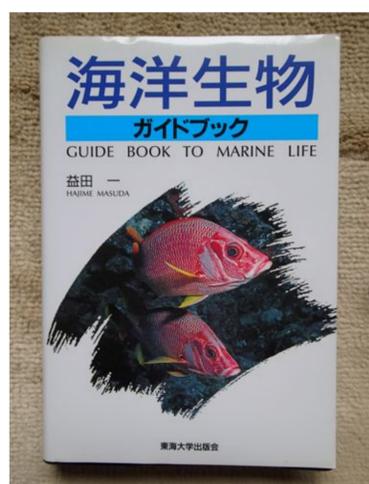
東海大学出版会

益田一氏としては珍しい写真集。撮りだめてきた数万点の写真の中から252枚を厳選。海藻、無脊椎動物、魚類、哺乳類を色あざやかな表情で表現。素晴らしい構成で海洋生物の魅力を伝える一冊。



1999年 海洋生物ガイドブック 東海大学出版会

ダイバーが海へ行く際にこの一冊を持っていけば間に合うようにと無脊椎動物から魚類までを一冊の本にまとめ「海洋生物ガイドブック」。またこの本にはそれまでダイバー向けに紹介されていなかったウミウシ未記載種も仮称として多く掲載、その後の「ウミウシブーム」が起こるきっかけとなった。



伊豆海洋公園から記録された 新種あるいは日本初記録種

益田一氏が伊豆海洋公園を拠点に行った研究活動で採集された魚の中には、学術的に貴重な多くの新種や日本初記録の魚種が発見されました。

スクーバダイビングという手段を用いたことで、それまでの海洋研究者には手の届かない海域での研究活動を行うことが出来た成果であり、日本の魚類学の研究にも多くの功績を残しました。

日本の魚類学への功績は「神奈川県立生命の星地球博物館」で開催「益田一展」にて詳しく述べられておりますが、ここではスペースの関係上、主なものだけを紹介いたします。

これらの発見で特筆すべきことは「ダイバーが新種の魚を発見出来る事」を証明したことである。このことがダイビングの動機づけとなり、更なる愛好家やフィッシュウォッチングの奥行きを深め、ダイビングの普及に大きな功績を残す事となりました。



成魚の体長は12cm。ベラ科タキベラ属。1970年頃から伊豆海洋公園水深40m付近で確認され、同年10月に入手された標本に基づき新種として記載される。学名には「*Bodianus masudai*」種小名の「*masudai*」には「益田氏の」という意味合いがある魚である。

成魚の体長は3cm程。現在も伊豆海洋公園のオクリダシでも普通に見られる。2000年に天皇陛下らの研究グループが「アカイソハゼ」を命名。学名は松浦啓一博士・瀬能宏博士が2006年に共同で命名。「*Eviota masudai*」と益田氏の名前が入っている。



成魚の体長は8.4cm程。1972年に出版された「日本列島の魚」で紹介され、1980年にイトヒキハナダイ属の新種として記載された。IOPでは現在も水深40m以深の岩礁域で観察することができる。

成魚の体長は15cm程。1971年1月、伊豆海洋公園水深50mの岩礁で採集された個体に基づき新種として記載された。この個体は採取後、江ノ島水族館にて飼育展示され、本種は表皮の一部が自然にはく離「脱皮」をする魚として話題となりました。



成魚の体長は10cm程。1974年2月伊豆海洋公園水深40mの岩礁で採集された個体に基づき日本初記録として報告された。現在でもダイバーに人気のある魚。現在もIOPでは秋に観察する事が出来る。

成魚の体長は8.8cm程。1972年10月、伊豆海洋公園水深30m砂場で採集された標本に基づき、新種として記載される。本種は新科、新属、新種。日本人として記載された初めての新科であり、日本の魚類学史上でも特筆すべき魚。現在もIOPでは水深30m付近で観察する事が出来る。



成魚の体長は4cm程。伊豆海洋公園で採集された個体が東宮御所へ献上され、その標本に基づき、天皇陛下らにより新種として記載された。IOPでは浅い水深の岩礁帯でまれに見ることができる。

フィッシュウォッチングを楽しむ 現在のダイバーの姿



ダイビングを楽しむ姿(石垣島にて撮影)



図鑑を片手にログブックを付けるダイバー

設立当時から整備されたダイビングリゾートであった伊豆海洋公園。現在はエントリー場所も整備、園内施設も充実し、より洗練されたポイントとして、多くのダイバーで賑わう伊豆半島を代表するダイビングポイント。

関東近郊のダイビングポイントは、千葉県から神奈川県三浦半島、湘南海岸、小田原、根府川、熱海と続き、東伊豆から南伊豆を経て西伊豆、沼津まで点在、多くのポイントが出来ました。ダイビングは自然とふれあい、海と接する事でストレスから解消、社会生活を行うための原動力となる安らぎとうるおいを得ることのできる、レクリエーション産業として発展してきました。今日も日本各地のポイントを訪れるダイバーの多くが、海中世界を楽しみ、ダイビングで見た生物を図鑑で探し、名前を確認しながらログブックをつける。

これら姿があるのは、1950年代後半に益田一氏がアクアラングと出会い、伊豆海洋公園ダイビングセンターを設立、その後スピアフィッシングから決別し相模湾の海洋生物の研究を始め、カラーでの水中写真を撮り、その成果を出版物として世に送り出した頃にレクリエーションとしてダイビングの可能性を見いだした事から始まります。

ダイビングの目的を自然観察 → フィッシュウォッチング → 生態図鑑の必要性と作成 → ダイビング人口の増加 → ダイビング産業の発展というマーケティングを描き、その後の研究活動でダイバーが利用できる図鑑の作成と共に、伊豆海洋公園の海でフィッシュウォッチング活動を行いながら、ダイビング雑誌やIOPダイビングニュース等で海洋生物情報やノウハウを日本中に発信、ダイビングを通じて日本の海洋文化を広め、フィッシュウォッチング発展に尽力を尽くした結果であることは明らかではないでしょうか。

ダイビング産業のマーケティング開発とビジネスモデルを作り上げた人が実業家であり、海洋生物学者、益田一氏といえるのではないのでしょうか。

現在、日本中で行われているフィッシュウォッチングはここ伊豆海洋公園での活動と実業家であった益田一氏の先見の明とヒラメキ、そして地道な努力があったからと言えるでしょう。伊豆海洋公園と益田一氏の歴史に触れ、少しでも興味を持って頂いた方には、ぜひ神奈川県立地球博物館の「益田一展」にも足をお運び頂ければ幸いです。

最後にこの展示パネル作成にあたり構成や内容の助言を頂いた水中写真家小林安雅氏、益田会の皆様。写真を提供して頂いた益田安規子氏、瀬能宏氏、友竹昇氏、土屋雅照氏、雑誌ダイバー編集部。情報を提供して頂いた須賀次郎氏、瀬能宏氏、その他多くの皆様に感謝を申し上げます。

引用文献 ・瀬能宏、中村宏治、2013知られざる海中世界、神奈川県立生命の星地球博物館編、益田一と日本の魚類学、魚類図鑑に生涯を捧げたDANDY、神奈川県立生命の星地球博物館、小田原pp10~21
・雑誌ダイバー2013年5~7月号「ニッポン潜水グラフィティ」須賀次郎著
・益田海洋プロダクション各種パンフレット ・益田一出版各書籍